

ヒマラヤへ 夢群像

信大60年 学士山岳会の挑戦

信大山岳会のOBでつくる信大雪山山岳会は9〜11月、大学創立60周年を記念してネパール・ヒマラヤに遠征隊を送る。7千7百の未踏ルートを送る若手、がんと闘いながら6千7百を自指す60代の隊員、それに現役部員も参加する。登山の魅力に魅れつつ、新たな目標に踏み出す隊員らの姿を見た。

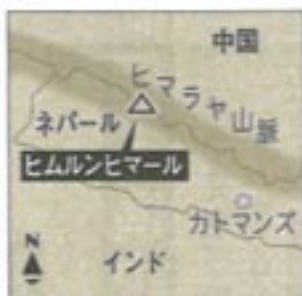
(松崎 林太郎)

☆……………☆
「夢を持ってください。そうしたら山登りの世界が広がりますよ」

山岳ガイドの花谷泰広さん(33)＝山梨県北杜市＝はこの夏、北アルプスや富士山を案内した登山者にこう語り掛けた。お客さんが自ら山行を企画できるアドバンスをするものもある。相手にきりげなく掛ける言葉は、実は自分自身に言い聞かせている言葉でもある。

「目標や夢を持って、と」とん突き詰められる世界」。山はそういう場だと思ふ。神戸市で生まれた花谷さん

未踏ルート狙う山岳ガイド



南アルプス甲斐駒ヶ岳のふもとで遠征の装備を手にする花谷さん

ずっと現役クライマー

信大雪山山岳会の遠征 中国との国境に近いネパールの「ベリヒマル山脈」を9〜11月に4チーム(計約60人)が遠征する。山岳ガイドら8人が参加する第1チームは、ヒムルンヒマル(7126m)に未踏ルートから挑む。近くのネムジュン北西壁とヒムジュン南壁の初登頂にも挑戦。ヒムジュンからヒムルンヒマルへの初登頂も予定している。

神戶高校(神戸市)では山岳部に入った。漠然と「登山家」が人生の目標となっていた。1995年には山岳部にある信大教育学部(長野市)に進んだ。信大山岳会の一員として、国内の山で経験を積み、ヒマラヤの7千7百に初登頂する機会にも恵まれた。卒業後の2001年、ヒマ

は幼稚園のころ、祖父に連れられて六甲山に登った。小学5年になると市少年団の登山教室に所属。サッカーもやっていたが、「未知の領域」を感じられる山に引かれた。中学時代、冒険家の植村直己さんの著書や先鋭登山家の自伝に刺激を受け、進学した

た。半日で歩ける距離を四つんばいになって3日かけてキャンプに戻った。「屈辱だった」という。

これを機に山からは距離を置いた。派遣労働者として諏訪郡富士見町の工場で働いた。そんな時、声を掛けてくれたのが、信大山岳会が海外に出掛けるようになる礎を築いた小川勝さん(07年死去、当時64)だった。信大の伊那松本山岳部(当時)の60(昭和35)年からの歩みの編集を任された。山行記録からは、より高みを自指そうとする部員たちの昔も今も変わらぬ思いが伝わってきた。自然が「山へのモチベーション(意欲)」が戻ってきた。

06年秋には「雷峰」にも出掛けた。メルル中央峰の標高差約1300mの水雪壁の登攀に成功した。

06年秋には「雷峰」にも出掛けた。メルル中央峰の標高差約1300mの水雪壁の登攀に成功した。

今回の遠征で自指す7千7百3座のうち、ネムジュン(7139m)、ヒムジュン(7092m)はともに標高差千近い水雪壁を登る。ガイドであるとともに、「とん突き詰められる現役のクライマー」でもあり続けるスタイルを確立したいと思っている。

ヒマラヤへ
夢群像

<2>

信大60年 学士山岳会の挑戦

2008年冬、都内で開かれた信大の同窓会。信大山岳会OBの松尾武久さん(67)・千葉県柏市。は、小宮山淳学長に「信大60周年に合わせて海外遠征をやりませよ」と告げた。これを機に大学側の協力も得て、同山岳会OBでつくる信大学士山岳会が温めていた構想が具体化。今年9、11月のネパール・ヒマラヤ遠征が決まり、松尾さんが実行委員長に就いた。

松尾さんが信大の仲間と海外の山に登るのは、ネパールのアンナプルナ2峰(7937m)に挑んだ1971(昭和46)年以来。登頂はならなかったが、信大学士山岳会にとつて初の海外遠征だった。

今回の遠征で松尾さんは、アンナプルナ山群を16日かけて一周するトレッキングに参加。20代の情熱を傾けた場を再び歩く。「あいつと行きたかった」。脳裏に浮かぶのは

仲間と挑む実行委員長



ヒマラヤへのトレーニングを兼ねて槍・穂高連峰を縦走した松尾さん＝8月上旬

07年に64歳で亡くなった小川勝さん。信大山岳会に海外登山研究会を設け、ネパールへの調査隊に加わるなど、信大がヒマラヤへ向かう礎を築いた後輩だ。

入会したころ、小川さんは

パーティーの中で体力の弱い人が据えられる2番手を歩いた。2年生ながら体力があつた松尾さんは先頭を任せられた。遅れていく小川さんを何度も目にした松尾さんは、飲み会の席で言い放った。「(山

は)命にかかわる。おまえは(山岳会を)辞めてしまえ」だが、小川さんはトレーニングを重ね、1年後には松尾さんも「たくましくなった」と認めるほどに。松尾さんが4年生の時には一緒に残雪期の槍・穂高連峰に4泊5日で登った。「一歩間違えば死に直結する」ルートが続くような山行を通じ、上下関係を越えたくましくなっていた。

鉄鋼関係の商社に入った松尾さんは東京や大阪などに勤務。「(仕事で)こんちくしよ」と思うことがあっても、テントの中で何日も吹雪に耐えたことを考えれば大したことではない」と思えた。

バブル経済の崩壊後は、人員削減と再就職のあせせんを担当。相手の人生を抱え込む大変な仕事だったが、「誰かがやらないといけない」。小川さんとヒマラヤ談義をした時のように、じつくり納得するまで話し合った。

10年ほど前、小川さんが住

む名古屋市に転勤。しばらくは電話をかけ合う程度だったが、再び一緒に近郊の低山などを歩くようになり、気持ちを通じ合わせた。07年1月、会社役員だった小川さんは勤務中に大動脈瘤で急死。先輩からの連絡に松尾さんはがくせんとした。

小川さんは、海外登山をする信大の後輩に経済的支援もしていた。今回のネパール遠征では、小川さんの追悼トレッキングも予定。学生時代の山仲間も数多く参加する。社会の一線から退く年代になった今、ともに人生の基礎を築いた仲間がかけがえのない存在だ。松尾さんは「山で一瞬に飯を食い、語らうのが楽しみでならない」と出発を心待ちにしている。

亡き友と行きたかった

アンナプルナ山群と信大
ネパール中部にあり、第1峰は標高8091m。第2峰は7937m。信大
学士山岳会は1971年、初の本格的な
海外遠征隊を第2峰に送った。7800
mまで到達したが、人文学部生だっ
た佐藤正敏さん(当時22)が下山
中に連絡を絶ち行方不明となった。

ヒマラヤへ
夢群像

信大60年 学士山岳会の挑戦

<3>

天候不順だったこの夏、北アルプスも雨の日が多かった。7月18日、剣岳(2999m)に向けて、登山口の富山県・馬場島を訪れた会社役員、駒井浩さん(66)＝神戸市、信大工学部卒。は雨空を見上げてつぶやいた。「ヒマラヤではおまえの分も登ってくるぞ」。登頂はあきらめて剣岳を後にした。

大学3年の夏、山岳部の仲間を剣岳での遭難で亡くした。ヒマラヤ遠征について熱く語り合った親友だった。

駒井さんは当時、資料を集めて研究を重ねたが、ヒマラヤへは行けなかった。遠征先の社会情勢なども踏まえて、母・妙子さん(90)から「海外登山だけはやめてくれ」と言われたのが大きかった。

今回の遠征はヒサンピーク(6091m)などの登頂を目指す。20代の夢を実現したいと思っている。ただ、不安もある。抗がん治療をしながらの出発になるからだ。

参加しながら治療がん抗

「物を飲み込めなくなってきた」と感じるようになったのは2007年夏。医師から胃に腫瘍があると告げられた。10月には胃の5分の4を切除。57あった体重は40kgに落ち、ほおはげっそりした。

「二の人生」が軌道に乗り始めたところを病魔に襲われた。だが、駒井さんは手術直後に遠征への参加を決意する。手の届く所まで来た夢をあきらめなくなかった。がんの転移を抑える治療が必要なら、遠征に持参する薬を医師と相談するなどして準備を進める。「山に登りたいと思うから、がんとも向き合うことができる」と感じていた。

昨年春に山登りを再開。登りはコースタイムの1.5倍かかるが、「時間さえかければ必ず登れる」と自らを奮い立たせた。今年5月には上高地へのルートである徳本峠を歩き、7月には高度順化を兼ねて富士山(3776m)に登った。そして訪れたのが剣岳の登山口、馬場島だった。

(当時)の2パーティーが剣岳の岩場に取り付いた。駒井さんは親友のパーティーを頂上で待ったが、登って来なかった。翌朝、捜したが見つからない。下山後、遺体で発見されたことを知る。

この遭難を受け、長野山岳会の工学部は半年間の謹慎をすることになる。全学部の山岳部員が100人を超える全盛期の中、山との向き合い方を問われる遭難となった。がんと闘いながら、山でこなくなった友の思いも胸に遠征に出掛ける駒井さん。学生時代にたたき込まれた「自分自身の調子を見極めて無理をしない」鉄則を守りつづけた。たとえ途中で引き返すことがあっても「負け」ではない。大好きな登山を続けるステップにしたいと思う。



北アルプス剣岳のふもとを訪れた駒井さん＝7月中旬

山が病と向き合う力に



信大山岳会 1949(昭和24)年の信大創立以降、山岳会は文学部と医学部の「松本」、教育学部と工学部の「長野」、繊維学部の上田、農学部の「伊那」で発足。60年代に遭難事故が相次いだのに伴い、しっかりした組織の確立が急務となる。62年の伊那と松本の合併を経て、78年に全学で一体化された。

ヒマラヤへ
夢群像

<4>

信大60年 学士山岳会の挑戦

8月13日正午すぎ、北アルプス・瀧沢にある県警山岳遭難救助隊基地が慌たたくなく、救助隊員の岸本俊朗さん(31)・長野市は、荒天の前穂高岳近くで滑落した小学生の男児(10)を助けに向かった。基地からコースタイムで2時間半の稜線まで50分で駆け上がり、ほかの隊員と交代で男児を背負い、夕方までに上高地へ無事下ろした。

岸本さんは時には雷雲の中を歩き、命を落とした遭難者と向き合うこともあるが、「体を張って遭難者を救助できた時、充実感に包まれる」という。岸本さんは5年ほど前まで、信大山岳会の一員として海外遠征に参加していた。

1997年に人文学部に入學して山岳会に所属。2001年には同期の大木信介さん(30)・東京都中野区とヨーロッパ・アルプスのマッターホルン(4477m)北壁に

「一線」退き救助に奮闘



仕事場となった北アルプス・瀧沢で登山者と話す
県警山岳救助隊員の岸本さん(右)＝8月中旬

登頂。グランド・シヨラス北壁、アイガー北壁とヨーロッパ・アルプスの「三大北壁」を目指すつもりだった。

北壁では、残りの標高差が約200mとなった絶壁で装備を落として身動きが取れなくなり途中、2日間のヒバーク(野営)を強いられた。雪と雷に見舞われる中を水だけで

しのぎ、「へろへろになった」。3日目、現地の救助隊に助けられた。「バツと現れたヘリコプターから隊員が降下する迅速な救助が鮮烈な印象」としてまぶたに残る。

03年には「登攀に限界を感じ、達成感を得られなくなっていた」。弟子入り後は都内の4畳半一間で暮らした。雑用に逼られ、いら立ちも募った。それでも、大判カメラや機材を担いで登った山で、身震いするような自然の景色を撮影し、「山が見せる一瞬の表情で人を感動させるのが使命だ」と感じるようになった。

03年のグランド・シヨラス北壁への再挑戦も、天候の悪化で撤退を余儀なくされた。「山のレベルが上がるのに伴い、さらに高い気力を求められるが、追いつかない」と感じ始めた。両視を安心させるとともに「打ち込んだ山を生かして人の役に立つ仕事をしたい」と思い、登攀の第一線から退いた。04年に県警の警察官となった。

大木さんは、9、11月の信大 学士山岳会ヒマラヤ遠征で7千7百峰の水氷壁に挑む。海外登山は岸本さんともに出掛けた03年のヨーロッパ・アルプス以来だ。再び高峰を目指すのは、今までは違う目的ができたからだ。「山岳写真家として食っていく第一歩」と位置付ける。大判フィルム800枚、中判フィルム100本も携え、白旗さんから離れたヒマラヤで「これだけ振れるのが楽しみ」という。「どんな形であれ、山とかわっていられるのは幸せ」。岸本さんと大木さんに共通する思いだ。遠征には参加しない岸本さんも、大木さんから遠征隊の挑戦から、新たなエネルギーをもらえそうな気がしている。

この時期、生き方を模索していたのはザイルを結び合っていた大木さんも同じだった。大木さんは、高校時代から一眼レフカメラを手に山に入り、山岳会では北米アラスカなどに遠征しながら写真部に所属。山岳写真家、白旗史朗さん(東京)の荷物持ちのアルバイトに汗を流した。白旗さんへの弟子入りを決めた

「山とかわかる幸せ」今も

南信 中信

ヒマラヤへ
夢群像

<5>

信大60年 学士山岳会の挑戦

「あきらめな。足の置き場はあるぞ」。千曲市の冠着山(1,052m)にある岩場に6月7日、信大理学部2年生、江川信さん(22)の声が響いた。ザイルを結んだ新人が高さ20mほどの岩場を登る。

北アルプスの積りで5月には実施した新人合宿を終えてから、江川さんをリーダーとする信大山岳会の運営が本格的に始まった。この日は唯一の上級生の江川さんと、新人4人のうち3人が参加。そこにOB1人が支援のために加わった。

和歌山市出身の江川さんは、高校の山岳部時代に訪れた北アルプスにひかれた。2008年に信大へ入学、「雪や岩にも触れることができる」と山岳会に入った。

山岳会のOBでつくる学士山岳会が9〜11月にネパール・ヒマラヤに挑む今回の遠征に現役として唯一参加する江川さん。ヒムロンヒマール(7,126m)に未踏のルートから挑む隊に参加する。

活動立て直し 思い込め

1960年代には信大全体で山岳会のメンバーは100人を超えたが、その後は年を追うごとに減少。7、8年前には新人が途中で辞めて新人生がゼロとなる年が出始めた。近年は会存続の危機が言われるようになっていく。

江川さんが入会した時も、当時の上級生は4年生1人だけ。テント生活や岩登りの技術などを体系的に教える山岳会独自の新人育成システムは失われていた。

それを助けたのはOBたちだった。千曲市や松本市の岩

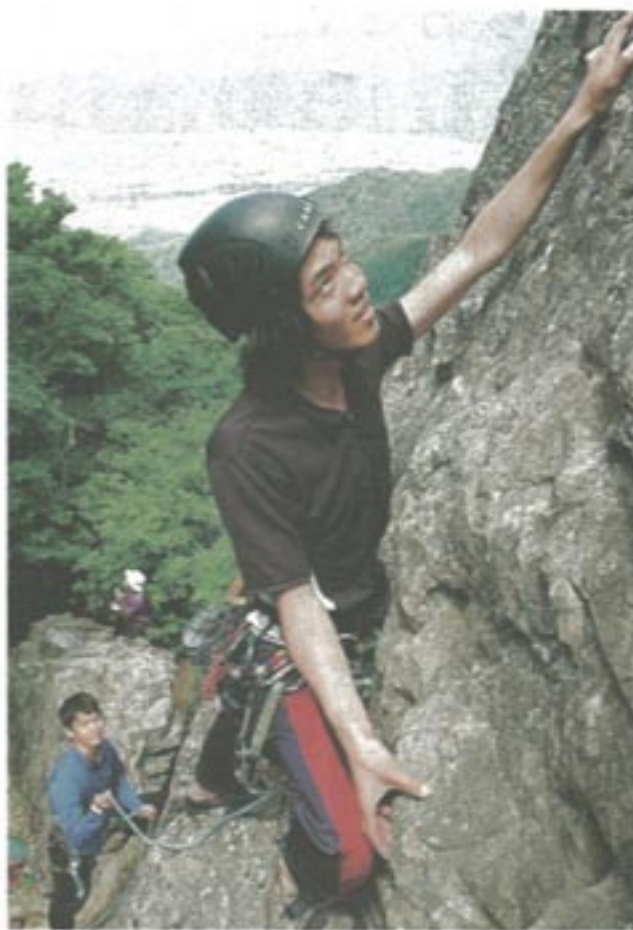
場に誘われ、岩登りの基礎を教えられた。江川さん自らも必死になって基本的な技術を身に付けた。一定のレベルが求められる北アルプス鹿島槍ヶ岳東尾根といった雪稜にも果敢に挑んだ。

今回の遠征に江川さんが誘われた背景には、将来に向けて山岳会を立て直したいOBの思いが込められている。ヒマラヤについて江川さんは「世界で一番高い山がある場所ぐらいの認識」しかなかった。「自分にはやれるだろうか」との思いの一方で、「未知な

る世界に行ってみよう」という気持ちももたげた。

ヒマラヤへの思いを胸に徐々に力を付け、苦手意識のあった岩登りでも臆せず、後輩を指導できるようになった。8月13〜18日には6日間という短い期間だったが、北アルプスの針ノ木岳から穂高連峰までを新人4人と縦走。OBの手を借りずに「自分たちの力で完成させた合宿」から今までにない達成感を得た。

江川さんの背中を追う農学部1年の小平貴則さん(18)は「山行ごとに自分が成長して



千曲市の冠着山の岩場を登る江川さん=6月7日

いくという気持ちに満たされる」。縦横学部1年の土田孝治さん(19)も「こんな自分でもできるんじゃないかという思いを味わえる」と登山の魅力に目覚めてきた。

ここ1、2年、北アルプスには数人の若い女性グループの姿が自立つようになってきた。中高年が主役になっていた山に若者が戻りつつあるとみる山関係者もいる。ただ、こうした傾向が本格的な登山にも若者が戻る兆しなのかは未知数だ。

江川さんは遠征を終えた自分を想像する時、「山岳会を一步一步着実に強くさせた」と思う。それが若者が山で輝く道を広げる礎になると思っている。

(松崎 林太郎)
(おわり)

「山で輝く若者」への一歩

信大の登山関連サークル 信大学生支援課によると、山岳会のほか、無雪期の縦走登山が中心の「ワンダーフォーゲル(ワングル)部」も部員減に悩む。長野、松本、伊那の各キャンパスにあったワングル部が数年前に一本化された。「スキー山岳部」は約10年前に廃部。一方、山歩き主体の「山歩会」は70人余。今年届け出があった山歩きやキャンプを楽しむ「ブルーフィールド」は約30人の会員がいる。